

## 森林生態系の保全を訴える南方熊楠の思想

### Thoughts of Kumagusu Minakata Appealing for the Protection of the Forest

橋爪 博幸

#### 要 旨

明治時代の日本で、田中正造と南方熊楠はいずれも、地域の人々の生活と身近にある自然環境を守るため、人生の一部をささげた先覚者として知られる。このうち南方熊楠は、和歌山県の田辺を拠点として、神社の森を守るために友人や協力者にあてて数多くの書簡をしたためたり、幾回にもわたって新聞や雑誌に記事を投稿したりした。本論文は、まずこれまで知られていない森林保全を訴える南方の筆による新聞記事を紹介し、次に彼が生涯にわたり自然保護を訴えつづけた背後にある思想の一端を、哲学者プラトンの宇宙観を参考にしつつ解きあかそうとするものである。南方は神社林などで過ごすひとときこそ、『パイドロス』などでプラトンが述べているような古代ギリシアにおいて人々が秘儀に参加し、神々しさに触れる体験がなされたことと同様に、言語などを介せずに人間の内面深く感化するものであると主張した。万物に創造主の息吹がかけられていることを確信していた南方が、自然環境の保全を訴えるのは当然のことであった。世界規模で環境破壊が進行する今日であっても、およそ百年前に活躍した南方の環境思想は色あせることなく、今後ますます輝きを増していくものと考えられる。

キーワード：南方熊楠，プラトン，デミウルゴス，自然保護

#### はじめに

群馬県みどり市に位置する桐生大学は、クロマツの並木に囲まれた、いどり豊かなキャンパスにある。大学のシンボルとなるケヤキ並木のわきには遊歩道があり、そこにこぢんまりとした森がある。そこには関東地方に自生する樹木が植えられており、たとえばエゴノキやオオモミジ、アカシデ、リョウブなどが見られる。こうした落葉広葉樹に混じり、ツバキやカクレミノなど常緑広葉樹も含まれている。シュロが群生する大学構内の一角にはオナガが群れで飛来し羽を休めている。筆者は大学で環境論の講義を担当しており、学生とともに大学内の動植物の観察にひとときを充てることもあるが、秋には桐丘学園のキャンパス内で数種類のドングリがみるので、それらを集めて名称を当てさせたり、それが生える主要な樹林帯を解説したりしている。

環境論の講義ではまた、地球規模で生態系が危機に瀕している状況にも触れている。生態系はエコシステム ecosystem と英語で表記されるとおり、ひとつのシステム、つまり複数の要素が有機的につながりあって

できている集合体であり、全体としてある働きをもつ機能体のことである。生態系の概念を解説する際に、筆者は日本列島の植生分布を紹介したうえで、森林生態系を取りあげて説明することが多いが、環境保全に力を尽くした先人を紹介することもある。たとえば日本では、地域の人々の暮らしを守るため、同時にまたその地域の生態系を保全するための社会活動に力を入れた田中正造や南方熊楠などがいる。

周知のように、田中は足尾銅山の鉱毒問題を解決すべく明治天皇に直訴したことで知名度が高い。他方、南方は、明治時代の国家政策のひとつである神社合祀につよく反対したことで知られる。このうち南方が神社の森の保全を訴えたことはしばしば論じられてきたが、天然林の保全についても言及していることについては、あまり論じられていない。そこで本稿では『紀伊新報』に掲載された、これまで知られていない新聞記事などを紹介しつつ、南方の自然林保護の思想を掘りさげて考察することにしたい。

#### 自然人・南方熊楠

南方熊楠は、1867年に和歌山で生まれ、幼いころか

ら野山に親しんだ。山にすむ天狗のイメージと、鼻筋のおった端正な顔立ちから「てんぎゃん」と呼ばれた。その名にある「熊楠」とは、現在の和歌山県海南市に位置する藤白神社境内のクスノキの巨木の神にちなんで名づけられている。以下、南方と自然（主として生物界）とのふれあいについて概観しておきたい。

東京大学予備門に在学中、南方は日光に出かけ、スギの巨木の並木を歩いたり、眼前にひろがる中禅寺湖の雄大な眺めをスケッチに残したりしている。同時期には、江ノ島へ採集旅行に出かけてもいる。アメリカ時代には、大陸南部への単独旅行をこころみ、キノコやサボテンを採集して用紙に丁寧に貼りつけ腊葉標本にした。このころまでに、鉱物や化石の収集にも力を入れている。

アメリカ滞在中には地衣類の研究者である W・W・カルキンスと知りあい、南方は地衣植物を採集するためジャクソンビルに数か月間滞在している。そのとき集められた地衣標本の一部は、アメリカの科学雑誌『サイエンス』に掲載されたカルキンスによる短報のなかで紹介されている<sup>1)</sup>。キューバ島ではキセル貝などを採集し、彼はそれをマッチ箱に入れて日本に持ち帰っている。英国ロンドンの市内においても、ハイドパークなどでしばしば採集をこころみ、日記に記録している。1898年にはロンドン郊外に住む作家の A・モリソンを訪ねてエッピングに出向き、オーク（ヨーロッパナラ）やビーチ（ヨーロッパブナ）、ホワイトバーチ、ヨーロッパシデなどの樹木がおいしげる森<sup>2)</sup>を散策している。

1900年に帰国後、南方は和歌山県の聖地のひとつ那智山にこもり、連日にわたり原生林に分け入り採集活動を行っている。高等植物や昆虫類、陸産貝類、菌類、変形菌類など身近にいる生物を片端から採集し、標本にしている。1903年には英国の藻類研究者 G・S・ウエストと手紙を通じて知りあい、それまで作成してきた淡水産藻類のプレパラート標本を送り、種名の同定を依頼している<sup>3)</sup>。同年にはまた淡水産藻類の分布に関する短報が『ネイチャー』に掲載された。このころ、菌類の彩色図譜の制作にも着手しはじめた。

1904年、田辺に定住してから彼は、近隣の神社林で菌類や変形菌類、蘚苔類など、当時は「隠花植物」と呼ばれた花をつけない植物群の収集に力を入れた。1906年には英国の変形菌分類学者 A・リスターに変形菌の同定を依頼しはじめ、同年、田辺にある糸田の猿神社境内で新種の変形菌アルキリア・グラウカを発見した。また1908年に玉置山方面へ植物採集旅行に出か

けた際に、のちに新種と鑑定されるクマノチョウジゴケを発見している。

このころ、日本帝国では神社合祀政策が推進され、神社の森が伐採されるなどした。南方は自宅ちかくの糸田の猿神社の破壊をまのあたりにして神社合祀政策に反対する立場をかため、1909年から地元の新聞『牟婁新報』にたびたび神社合祀反対の意見を載せることになった。

1929年に彼が昭和天皇へご進講を行った神島大<sup>かしまだいみょう</sup>明神<sup>じん</sup>をまつる神島を、国の天然記念物に指定する活動に力を入れるなど、晩年まで神社林を保全するために奔走した。神社の樹木の保全を訴える南方の姿勢は生涯にわたり一貫して変わることがなかった。

### 自然保護にかかわる新資料 「トチ及びミヅメに就て」

南方が神社の森だけでなく、ひろく自然の保護を訴えたことについては、これまでその概略のみ論じられることが多く、具体的な資料にもとづいて検証される機会は少なかった。そこで本稿では、これまで知られていない南方の自然保護に関する新資料「トチ及びミヅメに就て」を紹介し、具体的に彼がどのような自然を守ろうとしたのかを見ていくことにしたい。

この記事は、1915年9月11日付の『紀伊新報』に掲載されている（写真1）。同年9月9日付の同紙に載った神谷龍一郎（和歌山県林業技手）の「トチのみの利用でも充分だ」と題する記事に返答するかたちで書かれたこの文章は、平凡社から刊行されている『南方熊楠全集』別巻2の著作目録にも記載がない。適宜、漢字をひらがなに改めるなどして（以下、『紀伊新報』から引用する文については同様とする）、記事の書きだし部分を次に紹介する。



写真1 これまで知られていない資料のひとつ「トチ及びミヅメに就て」の新聞記事（一部）。(熊楠氏蔵)

九月九日の『紀伊新報』第二頁に神谷技手のこの二木についての話を載せられたはずこぶる有益のことだ。トチはむかしはトチ細工とて主に食籠、食卓碗、果子盆等にひき作りて田辺専有の名産だった。すでに正徳二年に出来た『和漢三才図会』巻六七にも、紀州十産をあげたうちに栃細工（田辺）を出し文化中開板の〔十返舎〕一九の『金草鞋九編』にも「田辺栃細工名物なり」と載りある。<sup>4)</sup>

トチノキ科に属する落葉高木のひとつトチノキは、沖縄をのぞく日本各地にひろく分布する。湿潤な土壌をこのんで生育しサワグルミなどとともにしばしば沢沿いに見られる。植物生態学者であった故菊池多賀夫は、トチノキがまるで背後に谷を背負うかのようにして生えると言われた<sup>5)</sup>。種子であるトチノミはかつて食用に保存され、太い幹からとれる材は今日でも建築や食器などとして広く利用されている。トチノキはまた庭木や街路樹として植樹されることが多い。ここ桐生大学の構内にも数本のトチノキが植えられており、毎年秋を迎える頃になると、光沢のある丸い種子がおびただしく落ちているのを見かける。一方のミズメについて、南方は「樺の一種で、イタヤミネバリまたアツサまたハンサという」<sup>6)</sup>などと記しているが、こちらはカバノキ科の落葉高木のひとつで、琉球をのぞく日本の山地に自生する。その名称は若枝を折ると水がしたたるように樹液が出ることにちなむ。樹皮にサリチル酸メチルをふくみ、独特の臭気がある。南方が記すように別名アズサ、またはイタヤミネバリという。材には美しい木目があり、家具や器具として利用される。アズサは漢字で「梓」と書くが、中国で古くはこれを板木として用いたので、図書を出版する意味で今日でも上梓という言葉が使われている。

さて、9月9日に掲載された記事で神谷技師は、和歌山県内陸部の富里村（現在は田辺市）にトチノキの大木があり、「近頃このトチだとかブナだとかカエデだとか従来立枯らしに終わらしめていた雑木を利用することに一般着眼されてきたのは喜ぶべき現象」<sup>7)</sup>であると記し、トチなど雑木は伐採して、おおいに利用すべきだと主張している。南方も「神谷技手の言われるごとく本郡の一部に今もトチが多くあることなら、注文に応じ、他府県へも出し、また田辺の名産をも再興したいことだ」<sup>8)</sup>と記し、トチノキなどの材を活用することによって、今でいう地域おこしを提案している。

しかし別の箇所では南方は、むやみに自生種を伐採す

ることには注意すべきだとして、次のようにも記している。

さてこれらの木は従来予の知るところでは、熊野〔の〕何の地にあるというほど多からぬものゆえ、またかかるやや稀有な木はおいおい値段もあがるものなれば、かえすがえすも、その産業の山持ちの一時の注文に乗り出して例の濫伐を行い、せつかく今日までわずかに一地方にのこりおったものを絶してしまわぬよう心がけられたいことだ。<sup>9)</sup>

今からちょうど百年前にあたる1915年は、日本が大正の時代を迎えてまもないころで、前年には第一次世界大戦が勃発している。日本帝国はこれに参戦し、社会は好景気に沸いていた。大正デモクラシーが叫ばれていたこの時代にあつて、森林など自然環境に注意をはらう人物は、三好学（東京帝國大学教授）など、ごくわずかであった。自然保護などほとんど見向きもされぬ時代相のもとで南方は、新聞投書のなかで、今日のわれわれが読んでも古くない、森林生態系を保全すべきだとする自説を展開している。ここで南方は、「〔天然林に生える〕雑木を全滅してむやみにスギ〔や〕ヒノキばかり〔を〕作らするは決して深慮ありとおもわれぬ」<sup>10)</sup>と記し、自然林を伐採して人工林化することに異議をとなえている。

### プラトンが言及する秘儀（ミステリア）

そもそも南方はなぜ森林などの自然環境を保護すべきだと考えたのであろうか。この問いへの答えは、神社合祀反対運動のさなかに出された数多くの意見書のなかでほぼ語りつくされている。ものこころつく頃から、さまざまな生物に関心を寄せてきた南方にとって、動物や植物、菌類など種々の生物を生態学の分野からみて保存すべきであると訴えるのは当然のことであつた。しかし学者としての憂慮よりいっそう深く、南方にはこの世に存在するあらゆる事物への、同時にまた人間への、温かなまなざしがあつたことを見落とすべきではない。森のなかでたずみながら菌類や変形菌類をまえにして、南方の眼はいったい何を見すえていたのだろうか。この問いに対する答えとなるような比喩が、プラトンに触れた『南方二書』の次なる記述に見られる。

プラトンは〔中略〕秘密儀 mystery を讀して秘密儀なるかな、秘密儀なるかな、といえり。秘密とてむ

りに物をかくすということにあらざるべく、すなわち何の教にも顕密の二事ありて、言語文章論議もて言いあらし伝え化し得ぬところを、在来の威儀によって不言不筆、たちまちにして頭から足の底まで感化〔し〕忘るる能わざらしむるものをいいしなるべし。<sup>11)</sup>

南方はここで、古代ギリシアの哲学者プラトンが「秘密儀」を称賛したことに言及している。プラトンが注目する秘儀は、「秘密」とはいえ故意に隠すというわけではなく、言葉や文章で論ずることなしに、ある人間を内面から全身全霊にわたり瞬時に感化し、以後忘れることのないようにさせる秘められた教えのことであろうと推察している。宗教学者である中沢新一は、数多くある著書のひとつ『森のバロック』で、南方熊楠について多面的かつ深く考察し、さらに上記引用箇所が、神社の森を守ろうとした南方の思想の中核をなすものであるといち早く指摘している<sup>12)</sup>。しかし中沢は、「秘密儀」と日本の神道とを関連づけて述べているものの、プラトンの秘密儀 mystery については詳述していない。そこでわれわれは、以下において簡潔に、プラトンがいかなる文脈で mystery をとりあげ、かつ南方がなぜここでプラトンの秘儀を引用したのか、探ることにしたい。

プラトンのいう秘儀（ミュステーリア）とは古代ギリシアにおいて、ごく一部の人間にのみ許された儀式のことであり、大地母神デメテルをまつる祭祀を指している<sup>13)</sup>。儀式に臨む人々は、段階的に種々の精進をかさねたのち、最終的には神殿においてデメテルの像を拝する奥義を伝授された。ただしプラトンは、ここで秘儀を紹介するだけにとどまらず、人間の本質的な部分と、不可視の世界との出会いを論じる場面で、比喩としてこの秘儀を引用している。つまり、プラトンはその著書『パイドロス』などにおいて、ある人間がこの秘儀の最奥に触れる聖なる時を、真実なる存在（イデア）の世界がその眼前にわずかながら開示される奇跡の瞬間になぞらえて、次のように述べている。「その姿に目をそそぎながら、身は神の前にあるかのように、怖れ慎しむ」<sup>14)</sup>と。

ここにおいて、南方がプラトンの「秘密儀」を引用する意図が浮かびあがってくる。それは日常生活における実利にではなく、高尚かつ高遠な哲理にかかわる。南方にとって、神社の社叢など数百年の長い年月にわたり残されてきた古木のしげる森に参拝することは、古代ギリシアにおいて秘儀へ参入することに通じ

ており、われわれの心が洗われ、その奥深くに緘黙する靈魂が、真実で美なる存在世界に触れる好機にほかならない（南方が人間の心の深奥に、靈魂の存在を想定していたことについては『高山寺蔵 南方熊楠書翰』に載る奥山直司の解説などを参照されたい<sup>15)</sup>）。

さて、そのような聖なる瞬間は、なにも神社の森にいるときにだけ訪れるものであるとはかぎらない。天然の森林であっても同様に起こりうることであり、さらに言えばこの世に存在する万物との出会いが、われわれに大切な気づきを与えてくれる契機となりうるのである。日本に帰国後、A・モリソンとともに英国ロンドン郊外のエッピングにある古オークの森を散策したときの様子をふり返るなかで、南方はロンドンの「熱塵」（石炭を燃やすことで発生するスモッグのことであろう）でひどく汚れた「腸」（ダメージを受けるのは肺のほうであろう）をいちど吐きだし、それを洗い終えてまたそれを飲み込んだ感覚があったと記しているが<sup>16)</sup>、まさしくそのときにこそ、古代ギリシアでの秘儀に触れるほどの感動が、南方を捉えて離さなかったにちがいない。

## プラトンが想定する宇宙の構築者(デミウルゴス)

ところで、以上に見てきたプラトンは、われわれが住むこの宇宙を創造した神のひとりとして、デミウルゴスを想定している。『テイマイオス』のなかでプラトンは、万物の構築者を次のように賛美している。

宇宙は、およそ生成した事物のうちの最も立派なものであり、〔なぜなら宇宙の〕製作者〔デミウルゴス〕のほうは、およそ原因となるもののうちの最善のものだからです。〔中略〕宇宙は、言論と知性（理性）によって把握され同一を保つところのものに倣って、製作されたわけなのです。<sup>17)</sup>

最初にプラトンは、宇宙万有が「生成した事物のうちの最も立派なもの」であるといい、それはなぜかと問うなら、「言論と知性（理性）によって把握され同一を保つところのもの」、つまり永遠なるイデア界を仮定するとして、その普遍なるイデア界をモデルとしつつ、すぐれた善なる者であるデミウルゴスが、われわれが認識するこの物質世界を製作したからであると考えている。プラトンは、かりにデミウルゴスがイデア界に、言いかえれば「どこから見ても完全に整合的な、高度に厳密に仕上げられた言論を与える」<sup>18)</sup> 場に注目することなしに、宇宙の創造に着手したとする

ならば、宇宙はこれほど立派なものにならなかったはずである、と補足している。もちろんプラトンは、デミウルゴスの存在証明などできないし、万人に語ることも不可能であることを承知していた。その証拠に「ありそうな言論をわれわれが与えることができるなら、それでよしとしなければなりません」と、プラトンはティマイオスに語らしめている<sup>19)</sup>。とはいえ、プラトンが着想するデミウルゴスなる神概念はその後ついでることがなく、たとえばグノーシス主義やヘルメス学といった神秘思想に引きつがれていった。

つづけてプラトンは、「一つの全体性を備えて完結した」<sup>20)</sup>ものとして宇宙が生成されていることを強調している。そして、ある材料（質料）を用いて、デミウルゴスにより形づくられた一なる宇宙に、プラトンは、万物を秩序づける作用原理として「宇宙の魂」なるものを先行させている。生物体にやどる生命力のごときこの魂についてプラトンは、ただひとつのものから順次、分割をくり返すことにより成立していったと説明している。

〔宇宙の創造主は〕まず、全体から一つの部分を切り離しました。その次には、全者の二倍の部分を、さらに第三には、第二の部分の一倍半で、第一の部分の三倍に当る部分を、〔中略〕第七には、第一の部分の二十七倍を、という工合に切り離して行ったのです。<sup>21)</sup>

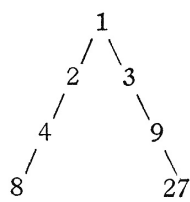


図1 プラトンが思いえがく宇宙にゆきわたる運動原理の展開図。

ここに出てくる数字の並びは音階を示す数列に対応するものであるが<sup>22)</sup>、この箇所も「ありそうな言論」のひとつであり、プラトンはまず「宇宙の魂」なるものを仮定し、つづいてそれが生成するプロセスを空想するものである。表現そのものが抽象的であるから、プラトンの言説を研究する後代の人々にとっては謎のひとつであり、「宇宙の魂」なるものや、数列のならば展開図の解釈をめぐって見解がわかれるところでもある。

### 万物が「大日」に由来する世界観

以上でわれわれは、プラトンの宇宙観の概略をみてきたわけであるが、南方もまた、万物があるひとつの偉大なる力の源泉を出発点として、そこから二方向にむけて下方展開していくとする世界像を抱いている。

そのことを示す図のひとつが、1903年12月6日付の彼の日記に描かれている（図2）<sup>23)</sup>。もちろん、プラトンと南方それぞれの図で示される内容が同じであるわけではない。プラトンが図1のなかで、運動をつかさどる力を、数列にもとづいて下方に位置づけたものと異なり、南方は宇宙の至高なる一存在に端を発する万物生成のプロセスを、そこに人間の心の起源もふくめて、独特の略語で表現している。しかし南方は、図2に見られるいくつかの用語をきちんと定義しているわけではない。そこでわれわれは、真言密教の僧侶である土宜法龍にあてた南方の書簡などを考慮しつつ、この図の解釈をこころみることにしたい。

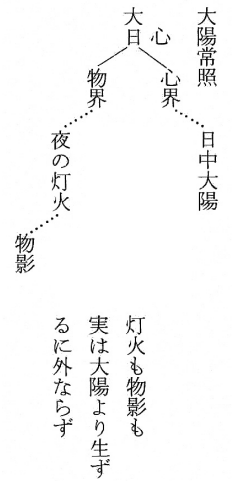


図2 南方熊楠の日記にある「物界」と「心界」の展開図。

図の最上部に位置づく「大日」とは、真言密教でいう最高仏・大日如来のことであり、土宜にあてた書簡を考慮すると、彼はここで胎藏界マンダラに描かれている大日如来を想定しているものと捉えることができる。右側に「大陽常照」とあるのは、この宇宙空間で太陽が光輝いていることを意味するものではなく、不可視の世界において、大日如来の光焰がいついかなるときでも永遠に、あまねく照らしていることを意味している。

さて上部中央の「大日」から、左右それぞれななめ下方に「物界」と「心界」とが表出する様子が示されている。これらの略語はいずれも南方の造語であり、前者は人間の魂のふるさととしての靈魂界が、後者は万物を形成させる事象の根源世界が想定されている。「心界」のななめ右下には「日中大陽」とあるが、これは「大日」のごく一部が分有されるかたちで、われわれ個々の人間の内面深くに、靈魂が「大日」の「大陽」とまったく同様に輝きつづけているさまを意味している。

さて図の下方に眼をうつすと、そこには「灯火も物影も実は大陽より生ずるに外ならず」と書き添えられている。「物界」から左下方に生成される「灯火」や「物影」とは、「大日」そのものではないものの、「大日」の生成作用により生じた森羅万象のことである。「灯火」や「物影」がいかなる基準にもとづいて区別されるものであるのか、ここでは説明されていない

が、いずれにせよ、エネルギーや物質が充満するこの顕現世界での出来事を指すものであり、それが大日如来の生成力によって現象化されていることを示している（なお、南方自身による「物界」の解説が、2004年に新たに発見された土宜あて書簡に見られるので参照されたい<sup>24)</sup>）。

ここで「物界」にだけ注目するなら、明らかに南方は、プラトンのいうデミウルゴスに類似するものとして「大日」を掲げており、そこから有象無象が生じてくるという世界観を表明している。ただしプラトンが創造神であるデミウルゴスと、生成される宇宙の素材（質料）とを別々に想定しているのに対し、南方はここでプラトンのいう質料を仮定せず、「大日」なる一語に、創造主と「物界」の生成作用という両義を同居させている。

ところで南方が帰依した真言密教では、六大（地水火風空識からなる宇宙の根源要素）が相互に密に関連しているとする宇宙像が説かれているのみであって、図2で示されているような、大日如来から森羅万象が表出することを説くものではない。至高なる一者から一方では万物の創成が、他方では至高者の魂の一粒が人間の身体にやどるとする宇宙・人間観はたぶんグノーシス主義を想起させるが<sup>25)</sup>、このような流出説に類する考え方を南方はおそらく、真言密教以外のいくつかの哲学や教義を——古代インドのヴェーダンタ学派の哲学<sup>26)</sup> や、H・P・ブラバツキーの神智学にもとづく教義<sup>27)</sup> などを——混淆させることにより、思い抱くようになっていったものとみえる。

### 「心」をもつ人間と宇宙万有

さて、最初に紹介した新資料「トチ及びミヅメに就て」の記事のなかで、南方はそれらの古木や天然林そのものを保全することを主張するものであった。この考え方の背景には、万物が不可視なる神の被造物であるとする思想が隠されている。宇宙の万物には神の息吹がかけられているのだ。よって、それらは当然のごとく神聖なるものであり守るべきものとなる。破壊することなど決して許されることではない。

次の一文は、南方が神社合祀に反対する意見を発表しはじめてまもなく、『牟婁新報』に掲載された記事「再び神社合祀合併に就て」の一部である（1909年10月12日に掲載）。このなかで南方は、それとなく「大日」と図示するところの宇宙の創造神を、プラトンのいうデミウルゴスを想定していることに、われわれは気づかねばならない。

郡村の役人輩とても、悉く人間に相違無れば、自分の植〔え〕た物、作〔つ〕た物、例えば花立一本障子紙一枚も、他人に破損さるゝは面白からざるべく〔中略〕無闇に〔神社の〕合祀合併などを励行せず〔中略〕成べく之を保存してやる様に願ひ度事なり。<sup>28)</sup>

そもそも神社の合祀とは、各地方のトップである郡長などの判断と指示のもとに、古くから維持されてきた神社の御神体が他の神社に移され、もと神社境内の鳥居や社殿が解体されることであり、明治時代の末期に、とくに三重県や和歌山県でさかんに行われた。境内ではその後、周囲をとりかこむ社叢が伐採されるなどして種々の破壊行為が進められたのである。

南方はここで、神社の社殿や鳥居などの人工物だけでなく明らかに神社境内を囲む社叢や古木をも視野に入れて記しているわけであるが、とくに神社林と、いったいどのように「自分の植えた物」や「作ったもの」とがつながるのだろうか。この箇所だけを読んでいてはどうも理解できない。そもそも神社の森や自然林は人智を超えたところに成立するものであり、鎮守の森や天然林は決して人間が作ったものではないのだから。

この一文をひもとくヒントは、先の引用にわざわざ「人間」という言葉が使われている点にある。南方が図2で示すように、神社の社叢や自然林などがまさしく「大日」による被造物であるとするなら、同時にまた「人間」こそ、「大日」の「心」の一部をわかち持つ高貴なる存在であるとするなら、「大日」の分身であるわれわれは、郡長など役人もふくめて、それらを作った張本人でもある。よってかりに、それを破壊する「人間」がいるとするなら、その者は知らず知らずのうちに、みずから作り出したものを、自身の手でもって破壊する愚を犯していることになるのである。

### ドングリひとつで善を為す

南方が生活と研究の拠点としていた和歌山県南部には、西日本の山地と同じく常緑広葉樹林（照葉樹林）がひろがる。照葉樹林の概説として教科書にはタブノキやスダジイが優占すると書かれているが、暖地に発達する森林であるから、このような代表種ばかりでなく、多種多様な樹種が見られる。南方はこうした天然林を「樹木〔が〕鬱陶」<sup>29)</sup>している（樹木が込み居るように生えている）などと記し、たかく評価している。

『紀伊新報』に載った記事「トチ及びミヅメに就て」

のなかで南方は、和歌山県の内陸部にトチノキやミズメの大木が残る森林があり、それを自然林として保全することの大切さを説いている。トチノキやミズメは、東北地方から中部地方の山地にかけてひろがる落葉広葉樹林でふつうに見られる樹種であるが、照葉樹林帯でもこれらが生じるといことは、その森林の多様性が大きいことをものがる。別の箇所では南方は、和歌山県と奈良県の県境に位置する大台ヶ原のブナ林が、学術的に貴重であるとの理由で、保存すべきであると述べている。

南方が神社の森や天然林の保全を訴える背景には、動植物の分布域に着目する生態学的な観点がたしかにある。しかし同時に、形而上学的な世界を想定した思想も関係している。つまり南方は、プラトンの「秘密儀」を引用しつつ神社林の保持を訴えているが、自然そのものが人間の心深くに、真実で美なる世界を垣間見せるものであると確信していた。加えて、あらゆる事物が「大日」のあらわれであるとする独特の世界観から南方は、森をはじめとする様々な自然環境と、そこに息づく種々の生物が、まさしくデミウルゴスの被造物であると捉えてもいたのである。

田中正造や南方熊楠が生きた時代とかわり、今日では人間による資源を浪費する諸活動の結果、河川や海、大気圏の汚染がすすみ、森林や草原における自然環境がおおきく変化してしまった。地球規模で考えつつ、身近な地域に根ざして行動することが求められる時代にあって、身のまわりにある事物で、かつての多様な生物がいきづく環境をとりもどすための活動が可能であるかもしれない。たとえば、昆虫学者の後藤伸が生前に、南方熊楠の遺志を継承して、田辺で「イチイガシの会」を組織し熊野の自然林復活活動に取り組んだように。

コナラ、ウバメガシ、マテバシイ、スダジイ、カシワ——これらはいずれも桐丘学園の敷地内でみられるブナ科の高木種で、秋にはドングリを結実させる。キャンパスの一部にはシラカシが多く植えられた区画があり、秋から冬にかけて林床はそのドングリで一面がおおわれる。たったひとつのドングリでも土中に埋めるだけで容易に発芽するし、それらを植木鉢などで育てれば1~2年で立派な若木に成長する(写真2)。ドングリひとつで財を成す



写真2 桐生大学構内で筆者がドングリから育てているシラカシとウバメガシの幼木。

ことはできないが、善を為すことはできる。育てた苗木を植林できれば、ささやかな社会貢献につながる。本学で環境論をまなぶ学生が、大学のキャンパス内でみずから拾い集めたドングリを在籍中に育てたうえで、それらを足尾銅山の荒廃した山肌などに植えにく植林体験活動などで汗をながすとするならば、歩みは亀のようにゆっくりであるけれども、環境教育のこころみのひとつとして、おおいに有効活用できるように思われる。

## 謝辞

本稿で紹介する「トチ及びミズメに就て」の新聞資料は、現在、(株)紀伊民報本社(田辺市)に保管されている。(株)紀伊民報本社のご厚意で、筆者は紀伊民報本社内においてその原資料の調査ならびに複写のご許可をいただいた。ここに記して御礼申し上げます。本稿の作成では、平成27年度科学研究費基盤研究B「基礎資料に基づく南方熊楠思想の総合的研究」(課題番号:26284017, 研究代表:松居竜五)の補助金を活用しています。

## 注

- 1) W. W. Calkins: Remarks on American Lichenology ( II ). Science, Vol.20: No.505, 205-206.
- 2) E. N. Buxton: Epping Forest. London: E. Stanford, 114-117, 1898.
- 3) 松居竜五・田村義也編: 南方熊楠大事典. 勉誠出版, 109, 2012.
- 4) 南方熊楠: トチ及びミズメに就て. 紀伊新報, 2, 1915年9月11日.
- 5) 高槻成紀・富士田裕子・津田智: ねこさんから教えてもらったこと. 菊池多賀夫先生追悼文集出版会, 57, 2012.
- 6) 前掲, 注4) に同じ.
- 7) トチのみの利用でも充分だ. 紀伊新報, 2, 1915年9月9日.
- 8) 前掲, 注4) に同じ.
- 9) 同前.
- 10) 同前.
- 11) 南方熊楠全集 7. 平凡社, 506, 1971. 『南方二書』は東京帝国大学の松村任三にあてて記された神社合祀反対意見文書の代表格で、おもに植物学や考古学の視点から神社合祀の弊害が多々述べられている。
- 12) 中沢新一: 森のパロック. せりか書房, 289-294,

- 1992.
- 13) 鈴木照雄ほか訳：プラトン全集5. 岩波書店, 270-271, 1974.
- 14) 同前, 191.
- 15) 奥山直司・雲藤等・神田英昭編：高山寺蔵 南方熊楠書簡 土宜法龍宛 1893-1922. 藤原書店, 341, 2010.
- 16) 南方熊楠：神社合祀反対意見. 牟婁新報, 3, 1910年2月21日.
- 17) 種山恭子ほか訳：プラトン全集12. 岩波書店, 30, 1975.
- 18) 同前.
- 19) 同前, 31.
- 20) 同前, 38.
- 21) 同前, 42. 図1も左に同じ.
- 22) 同前, 182-187.
- 23) 南方熊楠日記2. 八坂書房, 387, 1987.
- 24) 前掲, 注15), 269-270.
- 25) クルト・ルドルフ (大貫隆・入江良平・筒井賢治訳)：グノーシス. 岩波書店, 76, 2001.
- 26) 前掲, 注15), 70-71.
- 27) 橋爪博幸：南方熊楠と現世肯定. 文明と哲学, 3号, 燈影舎, 143, 2010.
- 28) 南方文枝：父南方熊楠を語る. 日本エディタースクール出版部, 138, 1981.
- 29) 前掲, 注11), 487.
- 30) 熊野の森ネットワークいちいがしの会編：明日なき森 カメモシ先生が熊野で語る 後藤伸講演録. 新評論, 5, 2008.

## Thoughts of Kumagusu Minakata Appealing for the Protection of the Forest

Hiroyuki Hashizume

### Abstract

Both Shozo Tanaka and Kumagusu Minakata, who were active during the Meiji era in Japan, are known as the pioneers who have dedicated a part of their lives to protect the lives of local people as well as the natural environment. One of them, Minakata, based in Tanabe in Wakayama Prefecture, wrote a number of letters addressing his friends and collaborators to protect the forest of shrines, and submitted articles in newspapers and magazines. This paper introduces a newspaper article that Minakata wrote to appeal for forest conservation, which has not yet been known so far. At the same time, it clarifies part of the underlying thoughts behind Minakata's appeal for nature protection throughout his lifetime. Minakata insisted that a moment we spent in the shrine forest and the like is the same opportunity to participate in a secret religious ceremony (mystery) to touch the divinity, as described by the philosopher Plato of ancient Greece. It was a matter of course that Minakata, who was convinced that all things are inspired by the breath of Creator, appealed for the conservation of the natural environment. Even today when environmental destruction is progressing in a global scale, we believe that the environmental ideas of Minakata who lived about a century ago will never fade but will continue to shine in the future.

*Keywords:* Kumagusu Minakata, Plato, Demiurge, nature protection